

おわりに

救急医療は医の原点、医療の原点であることを、医師も行政官も国民も理解して、救急医療体制の整備、構築に当たることが、救急医療改革の基本であると思う。そのためには、医師が「医療は仁術」であることを理解し、行政はそのための財源を提供して、これに応え、また、国民はこれを当たり前のこととして享受するのではなく、そこには多くの関係者の努力と献身があることを知って救急診療を受けるべきであろう。

本書は、国民に救急医療の現状を理解して頂くために、一般書店に展示販売されることを意図して執筆した。このことから、医師、とくに救急医療、救急医学を専門とする医師にとっては、こんなわかりきったことをくどくどと書くなと思われるかもしれない。しかし、救急医療は国民にとっても身近な医療であり、できるだけ多くの国民に本書を読み理解して頂きたいと思った。書き終わってみると、それでも言葉足らずのところが多くなるように思う。なんとなく中途半端な本になってしまった感がしないでもない。

救急医療は、泥沼の医療であり、真面目にしようとするほど泥沼は深くなり、身動きできなくなってしまう。これは医療機関（医師）も消防機関（救急隊員）も行政（国、市町村）も同じである。だからといってそのまま放置して置けばよいという医療でもない。誰かが犠牲になって、できることを改善し、一人でも多くの国民を救命できるように努力することが、医師や救急隊や行政に課せられた使命であると思う。

多くの関係者が努力し、協力すれば、まだまだ改善できる余地はあるように思う。冒頭でも述べたように、一部に厳しい文書もあるが、これは40年近く救急医療に、救急医学教育に、医療行政にも参加してきた一老医師の意見であることを、関係者の皆様にはご理解願いたい。